令和６年度　学校における居場所と絆づくり実践研究事業　実施報告書

１　学校名

栃木県立小山南高等学校

２　実施学年等

第２学年

３　生徒に期待する姿

【学校教育目標】

１ 誠実で判断力があり、自主的精神に充ちた、情操豊かな人間の育成を期する。

２ 自他を敬愛し、勤労と責任を重んじる人間の育成を期する。

３ 気力および体力の充実した、心身ともに健康な人間の育成を期する。

【生徒指標】

「明るく　寛く　健やかに」

【２学年目標】

学び：自ら学び続ける姿勢と確かな学力をつける。（知）

和み：思いやりを持って、自分と他者のよさを認め集団としての力を高める。（徳）

挑み：努力を惜しまず、粘り強く取り組むことのできる心と体を鍛える。（体）

４　本事業の内容

（１）年度途中における欠席状況等の分析及び不登校の兆候が見られる生徒を対象とした初期対応の取組

（２）アンケート調査による実態把握及びすべての生徒を対象とした不登校の未然防止に向けた取組の工夫

（３）年３回の学校訪問

【第１回学校訪問】 令和６年６月	【第２回学校訪問】 令和６年８月	【第３回学校訪問 】 令和７年１月
○　本事業の趣旨説明 ○　欠席状況の把握 ○　アンケート調査結果の分析 ○　学校の取組状況の把握 ○　今後の取組について検討	○　アンケート調査結果の分析 ○　４～７月における 10 日以上の欠席者数の確認 ○　１学期の状況を踏まえた２学期の取組についての助言	○　アンケート調査結果の分析 ○　４～12 月における 20 日以上の欠席者数の確認 ○　８月からの変化を踏まえた３学期の取組についての助言

※　訪問時には、生徒の欠席状況から、支援状況の確認、関係機関との連携支援等について情報共有をしたが、本報告書においては、個人情報保護の観点から内容は割愛する。

５　具体的な取組等

（１）第２学年の取組（不登校対策の視点から）

<table>
<tr><td rowspan="3">予防</td><td rowspan="2">未然防止</td><td rowspan="2">全ての生徒対象</td><td>○　生徒に関する情報の共通理解、先生方の生徒理解に向けた取組</td><td>○　生徒同士の相互理解や仲間づくり、生徒の主体的な活動を意図した取組</td></tr>
<tr><td>・　学年打ち合わせにおいて、各クラスの状況を他クラスへの共有を徹底。それらを情報交換会で全学年に共有するプロセスを月１回実施
・　部活動顧問と担任との情報交換
・　学期初めの面談週間実施
・　担任と教科担任、生徒指導主事との密な連携
・　欠席した生徒保護者への電話連絡
・　養護教諭との連携
・　朝の打合せの活用(共通理解)
・　Teams を活用した出欠状況の確認
・　Q-U 検査の活用
・　生徒の思いを聞き出すアンケートの実施
・　保護者との情報交換
・　小山警察署との連携(あしたルームの活用)</td><td>・　クラス編成の工夫(スポーツ科のクラスをコース混合に編成し、授業はコースごとに受講)
・　運動部を退部した生徒が入れる文化部を用意
・　学年を紅白に分けた体育祭(２クラス合同)
・　体育祭に向けた旗づくり
・　「いいことニュース(友だちのいいところについて伝えたいこと)」の作成、掲示
・　修学旅行の事前指導
・　生徒会行事の企画・運営
・　授業内（スポーツ総合演習）での、学校行事（体育祭）の種目の立案と実施
・　日頃の対話における「生徒を注意するよりも認め、声がけをする」ことの徹底
・　学年イベントの企画・実施</td></tr>
<tr><td>初期対応</td><td>気になる生徒対象</td><td>・　生徒面談の実施
・　保護者との情報共有
・　関係する先生方との情報共有</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">支援</td><td>必要な生徒対象</td><td>・　担任と教科担任、生徒指導部長との密な連携
・　担任の先生から欠席した生徒保護者への電話連絡
・　養護教諭との連携</td><td></td></tr>
</table>

（２）意識調査の結果等

【調査の実施時期】　１回目：６月　　２回目：８月　　３回目：１月

【各問の回答割合の推移】［%］※「当てはまる群(ア＋イ)」、「当てはまらないる群(ウ＋エ)」は整数値で表示

問１「学校が楽しい」

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア＋イ)	当てはまらない群(ウ＋エ)
１回目	55.3	36.2	7.2	1.3	91	9
２回目	50.7	39.7	6.8	2.7	90	10
３回目	43.7	45.2	6.7	4.4	89	11

問２「みんなで何かをするのは楽しい

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア＋イ)	当てはまらない群(ウ＋エ)
１回目	61.2	34.9	3.3	0.7	96	4
２回目	61.0	32.9	5.5	0.7	94	6
３回目	56.3	36.3	6.7	0.7	93	7

問３「授業に進んで取り組んでいる」

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア＋イ)	当てはまらない群(ウ＋エ)
１回目	55.3	38.2	5.9	0.7	93	7
２回目	43.2	48.6	7.5	0.7	92	8
３回目	53.3	37.8	6.7	2.2	91	9

問４「授業がよく分かる」

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア＋イ)	当てはまらない群(ウ＋エ)
１回目	32.2	56.6	10.5	0.7	89	11
２回目	30.8	55.5	11.6	2.1	86	14
３回目	30.4	52.6	15.6	1.5	83	17

ア　当てはまる　　イ　どちらかといえば当てはまる

ウ　どちらかといえば当てはまらない　　エ　当てはまらない

ア．　各問における調査結果推移の概要

○ 問１「学校が楽しい」
「当てはまる群」は、最終的に約 90%を維持した。

○ 問２「みんなで何かをするのは楽しい」
「当てはまる群」は 93～96%を維持した。

○ 問３「授業に進んで取り組んでいる」
「当てはまる群」は約 91～94%を維持した。３回目は「ア　当てはまる」が増加した。

○ 問４「授業がよく分かる」
「当てはまる群」は約 83～89%であった。

イ．　調査結果から

○　「みんなで何かをするのは楽しい」と感じる生徒が多いことについては、先生方が日頃から生徒同士が相互に理解を深め、関係を構築する場や機会、環境を意図的に設定してきたことの成果である。

○　３回目に問３「授業に進んで取り組んでいる」の「ア 当てはまる」が増加していることから、先生方が修学旅行後に進路意識を高め、授業を大事にすることを徹底したことにより、生徒が主体的に授業に取り組むようになったのではないか。

○　問４「授業がよく分かる」の「ア 当てはまる」の割合を維持できていることについては、先生方が生徒を理解し、工夫を凝らした「学びのある、わかる授業」を実践してきたことの成果である。

○　全４項目において、調査を重ねるごとに「当てはまる群」が微減し、「当てはまらない群」が微増する傾向が見られた。「当てはまる群」でも、もともと「当てはまらない群」に近い層の生徒が、調査の進行に伴い後者に移行したものと推察される。その要因としては、学校生活の内外に存在する多様な要素が考えられる。例えば、最終学年を見据えた進路に関する不安や課題、修学旅行に伴う人間関係上の不安・トラブル、教員や友人との関係性の変化、授業に関連する課題さらには家庭環境の変化等が挙げられる。これらを踏まえると、「当てはまる群」から「当てはまらない群」へと移行した生徒への支援やアプローチについては、学年内にとどまらず、学校全体で組織的に取り組む必要性があることを実感した。

６　成果

○　学年としてイベントを実施するのは今回が初めてであったが、生徒が自ら考案したクイズを学年全員で楽しむ姿を目の当たりにし感銘を受けた。教員主導ではなく、生徒が主体的に構想し、企画・運営に携わる一連のプロセスの中には、あらゆる面での成長を促すきっかけが内在していることを改めて認識した。

○　本学年は、もともと学校生活に対して肯定的な意識を有している生徒が多い学年である。そうした生徒に、より良い経験を提供しようと検討し実践を重ねることは、結果として、教員自身の教育活動の充実にもつながることを実感した。

○　調査対象学年の教員のみならず、学校の全教職員が調査結果や情報の共有をし、学校全体の課題として認識したうえで取組を進めることの重要性について、改めて理解を深めることができた。

○　全調査項目の中で「みんなで何かをするのは楽しい」と回答した生徒が最も多かったこと、また学年イベントにおける生徒の主体的・協働的な姿が顕著であったことから、これまで以上に学級・学年としての集団的活動(可能であれば生徒が主導の行事)等の必要性を改めて強く認識した。さらに、授業など日常のの学習活動においても、「みんなで何かをする楽しさ」を実感できるような学習経験を提供するためには、学年担当教員のみならず、学習部等の関係部署と連携し、授業づくりを進めていくことの重要性についても再認識した。

７　今後の取組

○　教員が「居場所づくり」を、生徒が「絆づくり」を進められるよう、引き続き、教職員は、情報共有を密にし、生徒同士が互いの良さを共有するためのシートの作成を行うなどアイデアを出し合いながら、日頃から称賛し合う雰囲気の醸成に努めたい。

○　進路選択や部活動においても中心的役割を担う時期となり、これまで経験したことのないプレッシャーやストレスを感じる生徒も多く、今回の数値には大きな伸びが見られなかった。しかし、次年度も、進路実現や部活動等で一定の区切りを迎え充実感を得られる時期に向けて本取組を継続することで、今後は、大きな改善が期待できると感じた。

○　学校全体及び学年の年間計画を見直し、可能な限り生徒が主体的に関われる集団的行事の実施について検討する。

○　年次進行の傾向を把握するため、本調査を全学年で実施することを検討する。既存の調査に組み込むなど、実施方法についてもあわせて検討を進めたい。

○　教員が面談・相談・個別学習支援など、生徒に関わる時間を確保するため、業務内容等の精選に学校全体で早急に取り組む必要がある。

〔県教育委員会担当者のコメント〕

　小山南高等学校の先生方は、学校の課題を共有しながら、綿密な情報共有及び連携による指導等を実施されていました。２学年では、学年主任の先生のリーダーシップのもと、担任の先生方の意見を尊重しながら、特に生徒の居場所を複数つくることや、日頃の対話を通して生徒を積極的に承認するという取組が行われていました。

　スポーツ科のクラス編成では、コーチング、アスリートの２コースの生徒が在籍できる構成になっていたり、生徒が運動部を退部してしまったとしても所属できる部活動が用意されたりしているなどの対応がされていました。また、体育祭、学年イベントなどの行事を通じて、生徒が主体的に活躍する機会を意図的に増やしたり、「いいことニュース」を通じて、生徒同士が相互承認したりするなどの工夫がありました。

　これらの取組により、様々な悩みを抱える生徒の居場所が確保されるとともに、生徒の自己存在感や自己肯定感が高められていくのではないかと考えます。そして、これらは、個別最適な生徒指導を目的とした先生方の熱意や創意工夫により推進されており、その根底には、「小山南高校の生徒にこうなってほしい」という思いが先生方で共有されていることが強く感じられました。

　来年度も、生徒が讃え合う雰囲気の醸成や生徒の主体的な取組の充実を通じて、生徒が充実した学校生活を送るとともに、生徒が希望する進路の実現や先生方が期待する生徒像の実現が達成されることを期待しています。